

2018.8.30
SPODフォーラム2018(香川大学)
トップリーダーセミナー

管理職のための 新たな入試・学生募集・高大接続を考えるセミナー

福島一政(追手門学院大学 副学長・教授)

1

自己紹介 福島 一 政

<職歴>

1972年4月 日本福祉大学に就職(施設課長・総務課長・研究情報部長・教務事務部長・学園事務局次長・財務部長等に就任)
2001年4月 常務理事・大学事務局長(～2009年3月)
2003年4月 学長補佐・執行役員(～2009年3月)
2009年4月 日本福祉大学 学園事業顧問(～2013年2月)・学校法人東邦学園 理事(～2013年3月)・名城大学大学院 大学・学校づくり研究科非常勤講師(～2015年9月)
2010年4月 愛媛大学 監事(～2012年3月)
2012年4月 愛媛大学客員教授・福井大学 監事(現在に至る)
2013年3月 追手門学院大学 副学長(現在に至る:2017年4月～2018年3月 学長代理業務)
2014年7月 学校法人追手門学院 理事(～2018年3月)
2018年4月 追手門学院大学 教授(現在に至る)

<その他役職>

1996年5月 日本私立大学協会大学教務研究委員会委員(～2008年3月)(2004年6月～2008年3月 副委員長)
2005年9月 大学行政学会会長(～2007年9月)
2008年4月 文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」ペーパーレフェリー(～2008年7月)
2008年4月 大学行政学会SDプログラム検討委員会委員長(～2010年6月)
2008年4月 読売新聞「大学の實力」調査・企画委員(現在に至る)
2017年7月 中央教育審議会臨時委員(現在に至る)

<著作等>

「学生の意識を引き出す大学職員の役割」2011年12月(Between241)
『大学経営論～実務家の視点と経験知の理論化～』2010年5月(日本エディタースクール出版部)
『大学のユニバーサル化とSD～大学職員の視点から～』『高等教育研究第13集』2010年5月(玉川大学出版部)所収
『私立大学の現状と課題』『私立大学マナジェメント』2009年4月(東進堂)所収
『プロフェッショナルな大学職員の養成』2007年7月(『大学と学生』第43号) 等



2

お話の内容

1. プログラムの概要
2. プログラムの到達目標
3. 中・高生の意識の実態
4. 中学校教師の実態
5. 追手門学院大学の事例
6. 高大接続改革
7. マーチン・トロウによる高等教育システムの段階的移行に伴う変化の図式
8. 教育が変わる
9. 高校進路指導と大学入試の実態
10. 「選抜型」から「育成型」の入試へ
11. 高大接続の新たな展開
12. 職員が大学教育にも責任を持つ

3

1. プログラムの概要

大学教育、高校教育、高大接続の一体的改革が求められ、2021年度入試からは新たな「大学入学共通テスト」が実施されることになっています。このテストについては、記述式問題と英語の四技能の導入ばかりが目立っていますが、高大接続システム改革会議ではもう少し深い議論がされていたように思います。横並びの「改革」を目指すのではなく、高校生や高校教師の実態や自大学の学生の実態を知り、「学力の三要素」を育成し評価する仕組みを考えることが必要だと考えています。とりわけ「分厚い中間層」といわれる学生層を受け入れている大学はそのことが強く求められていると思います。

本プログラムでは、以上のことを踏まえて、これからの大学入試、学生募集、高大接続のあり方について、「成長」をキーワードに、追手門学院大学のアサーティブプログラム・アサーティブ入試の事例を解説しつつ、今後の方向性へのヒントを提供したいと考えています。

4

2. プログラムの到達目標

1. 高校生や高校教師の実態について説明できる。
2. 自大学の学生実態を把握・分析して、入試、学生募集、高大接続の改革に活かすことができる。
3. 学生や高校生の「成長」を意識した制度改革を考えることができる。

5

3. 中・高生の意識の実態

自己卑下感情が強い＝自己肯定感が乏しい

「自分をダメな人間だと思う」割合

(単位: %)

	中学生				高校生			
	日本	米国	中国	韓国	日本	米国	中国	韓国
とてもそう思う	20.8	4.7	3.4	7.9	23.1	7.6	2.6	8.3
まあそう思う	35.2	9.5	7.7	33.8	42.7	14.0	10.1	37.0

(日本青少年研究所2008年調査)

© OTOMORI GAKUIN UNIVERSITY 2014. All rights reserved.

6

「自分はダメな人間だと思うことがある」割合

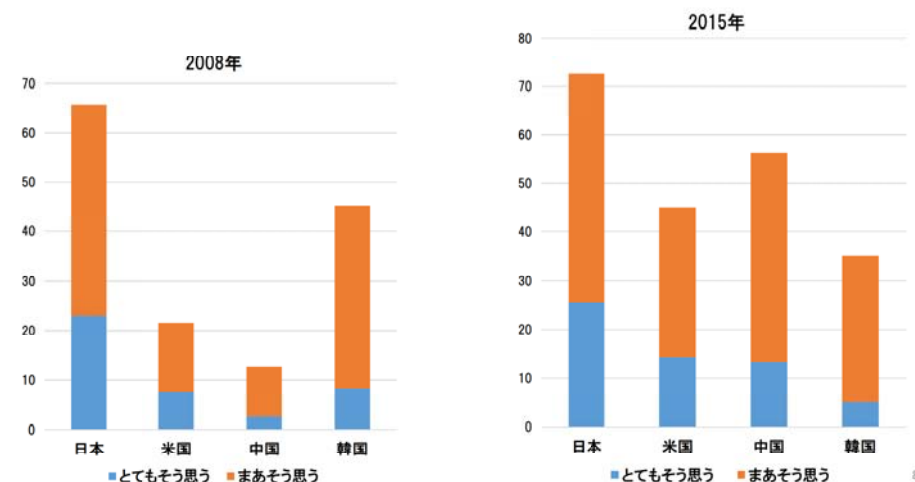
(単位: %)

	日 本	米 国	中 国	韓 国
とてもそう思う	25.5	14.2	13.2	5.0
まあそう思う	47.0	30.9	43.2	30.2

2015年「高校生の生活と意識に関する調査報告書」
(国立青少年教育振興機構)による

7

高校生の意識



8

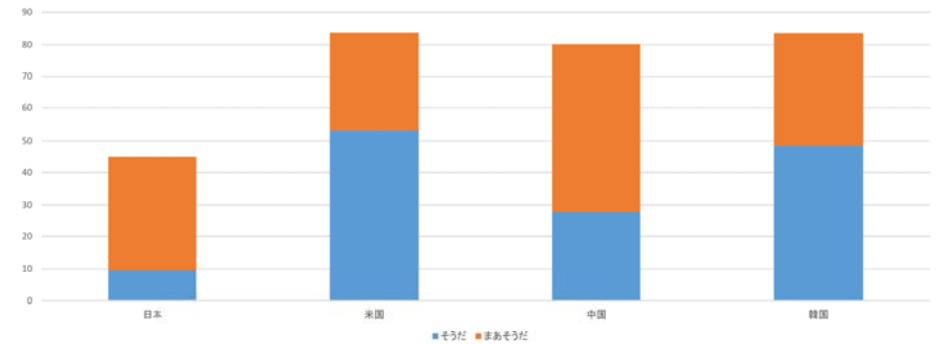
「私は価値のある人間だと思う」割合

(単位: %)

	日本	米国	中国	韓国
そうだ	9.6	53.2	27.9	48.5
まあそうだ	35.3	30.6	52.3	35.2
計	44.9	83.8	80.2	83.7

2018.3国立青少年教育振興機構「高校生の心と体の健康に関する意識調査報告書」による

私は価値のある人間だと思う



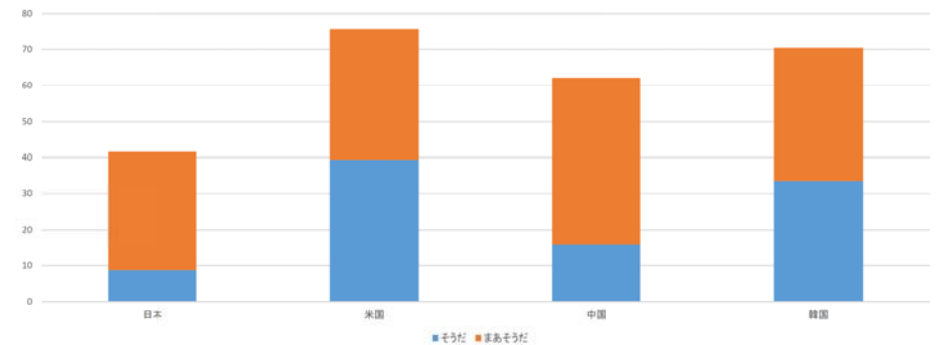
「私はいまの自分に満足している」割合

(単位: %)

	日本	米国	中国	韓国
そうだ	8.7	39.4	16	33.6
まあそうだ	32.8	36.2	46.2	36.8
計	41.5	75.6	62.2	70.4

2018.3国立青少年教育振興機構「高校生の心と体の健康に関する意識調査報告書」による

私はいまの自分に満足している



4. 中学校教師の実態

・教員(中学)の1週間当たり勤務時間

日本: 53. 9時間 (2位はカナダアルバータ州の48. 2時間。最少は、チリの29. 2時間)

平均: 38. 3時間(33カ国)

・教員の自己効力感

	批判的思考を促す	勉強ができると自信を持たせる	関心を示さない生徒に動機付け	学習の価値を見出す手助け
日本	15.6%	17.6%	21.9%	26.0%
調査国平均	80.3%	85.8%	70.0%	80.7%

(OECD「国際教員指導環境調査」2013年)

© OTTOMON GAKUIN UNIVERSITY 2014. All rights reserved.

13

5. 追手門学院大学の事例

学校法人 追手門学院の概要

1888年(明治21年)

設立当初(船行社小学校)



創設者
高島親之助

130年の
歴史と伝統



1966年 大学開学

2018年(平成30年)



追手門学院幼稚園
幼保連携型認定こども園



追手門学院小学校



追手門学院
大手前中・高等学校



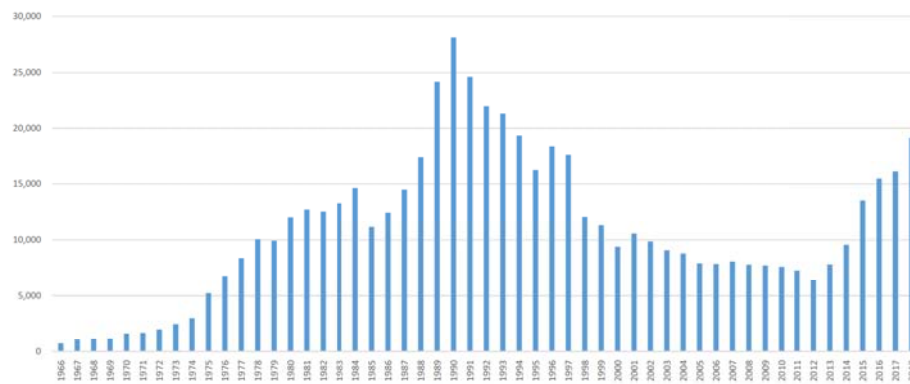
追手門学院大学・大学院



追手門学院
中・高等学校

14

追手門学院大学創立以来の志願者数推移



15

衝撃的だった追手門学院大学の实態

◆ 入学者のうち、**第一志望**が2~3割

◆ 関関同立、産近甲龍に入れなかったという「**不本意**」

⇒ 偏差値偏重の弊害

◆ 基礎学力不足・進学目的不明確・学習意欲不足・ミスマッチ

⇒ 大学授業の実態。初年次教育や授業改善だけでは解消できない

⇒ 「**分厚い中間層**」が入学する大学として、基礎学力と学習意欲をバランスよく身につけ、

生徒が主体的に自らの進路を考え決定できる仕組みの必要性。

16

そこで、何を変えたかったか

➤ 執行部

目先の志願者増でなく、大学で学ぶ姿勢を持つ学生を数多く入学させることに変える。
(偏差値やランキングでは測ることのできない大学の価値創造に視点を変える)

➤ 教員

大半の教員が、教えることに一層意欲が高まり、研究や社会連携、FDにも旺盛に 取り組むことができるように変える。

➤ 職員

高校生や学生と正面から向き合って対話し、彼らの実態を知って主体性を引き出し、自らの仕事に活かすことができるように変える。

➤ 高校生

大学で学ぶ意味、本人の将来、何を学ぶかなどについて話し合い、その生徒にあったアドバイスをし、その生徒が主体的に自らの進路を考え、決定することができるように変える。

➤ 高大接続

高校と大学が、一人の生徒を挟んで、その成長を促すことができるように変える。

17

新しい入試制度の誕生

- ◆ 2013年4月から制度設計の本格始動
「独立自彊」を念頭に！

- ◆ 2014年4月スタート
アサーティブプログラム・アサーティブ入試

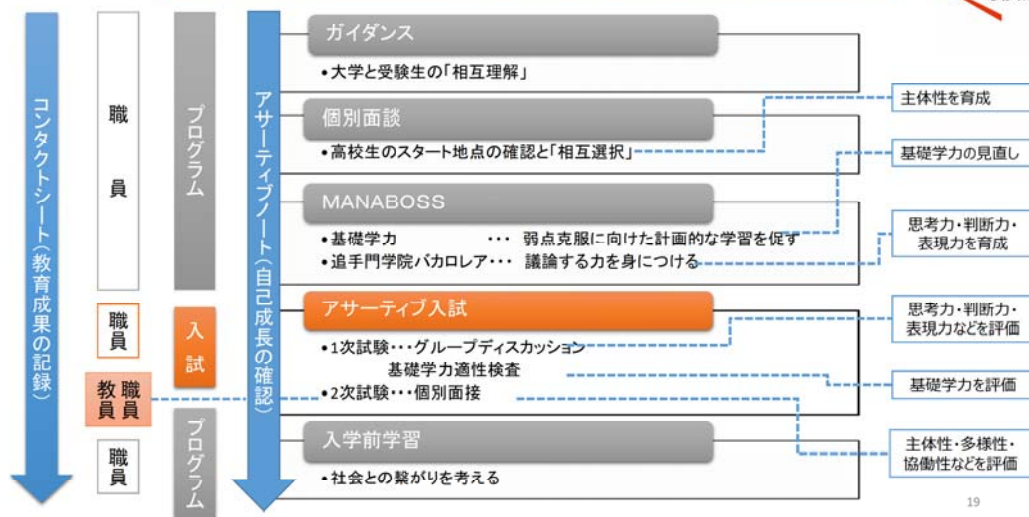
- ◆ 平成26年度大学教育再生加速プログラム
テーマⅢ「入試改革」に採択(選定された大学は、追手門学院大学・お茶の水女子大学・岡山大学の3大学、私立大学では本学のみ)
2017年度同プログラム中間評価で「S」評価(「入試改革」領域では本学のみ)

※ アサーティブの意味

相手の意見に耳を傾けながら、自分の意見や考えを主張することができる態度。
すなわち自分を知り、表現することが大切になると解釈

18

アサーティブプログラム・アサーティブ入試の概要



19

アサーティブプログラム

1. ガイダンスと本学職員との「個別面談」

オープンキャンパスも含めて年10数回のガイダンスとその際の個別面談。本学の専任職員が担当。

自分を知り、大学で何を学びたいかを問い、自ら気づくように促す。この面談は、本学への受験を促すことはせず、本人の将来と一緒に考えるというスタンスで行っている。

2. 本学独自開発のシステム

基礎学力の確認と向上、計画的学習を習慣づけると同時に、追手門学院大学バカロレアで、多様な観点から考察する力を育て、自分の意見を述べる力や他者の意見を受容する姿勢を養おうとするシステム。

『MANABOSS(マナボス)』 <http://www.manaboss.com/>

3. 自己成長を促す「アサーティブノート」

このプログラムの結果を記録し、振り返ることで自己成長を促す。自分自身を主語にして記述する。

20

アサーティブ入試

➤1次試験 グループディスカッションと基礎学力適性検査

グループディスカッションは、1グループ5～6名で約30分の議論。

主体性や協調性、論理性等を評価（職員2名による評価）。

基礎学力適性検査は、MANABOSS搭載問題と同様の形式で出題。（60分40問で国語と数学）

それぞれが一定水準以上かどうか総合的に評価して合否を判定。

➤2次試験 個別面接

教員と職員がペアとなり、志望理由や学問に対する意欲や知的関心のレベ

ル等を評価。

自分史上、
想像以上!

21

アサーティブに関するデータ

・アサーティブガイダンス、個別面接参加者数

対象入試年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
ガイダンス回数	18回	31回	24回	22回
ガイダンス参加者数	300名	777名	932名	1014名
個別面接延べ数	221名	710名	906名	978名
	190名	557名	751名	772名

・アサーティブプログラムを受けた者の入試出願者数、合格者数、入学者数

	2015年度			2016年度			2017年度			2018年度		
	出願者数	合格者数	入学者数	出願者数	出願者数 前年比	合格者数	入学者数	出願者数	出願者数 前年比	合格者数	入学者数	出願者数
アサーティブA日程	91名	53名	52名	203名		89名	87名	261名	128.6%	130名	130名	270名
アサーティブB日程				87名		41名	41名	134名	154.0%	60名	60名	113名
アサーティブ入試計	91名	53名	52名	290名	318.6%	130名	128名	395名	136.2%	190名	190名	383名
その他入試計	124名	51名	48名	377名	304.0%	162名	150名	474名	125.7%	200名	180名	424名
合 計	215名	104名	100名	667名	310.2%	292名	278名	869名	130.3%	390名	370名	807名

* その他入試とは、アサーティブプログラムを受けた者で、推薦入試、一般入試、センター試験利用入試等に出席した者の合計

個別面接からの出願率(3ヶ年平均)75.2% 出願からの合格率(3ヶ年平均)71.7% 合格からの入学率(3ヶ年平均)97.3%

22

分析枠組み

【研究の目的】

特定の入試・教育形態(アサーティブ入試)が、大学生の学習や成果にどのような影響を与えているのかを検証する。

【使用データ】

ベネッセi-キャリアが実施する「大学生基礎力調査」I および II

【分析枠組み】



自分史上、
想像以上!

アセスメント(入試区分別)

アセスメントの学内偏差値は、一貫して「一般入試」がもっとも高い。「アサーティブ」は1年次から2年次にかけて低下したものの、3年次に大きく上昇した。一方で、「推薦(附属)」が2年次から3年次にかけて低下している。



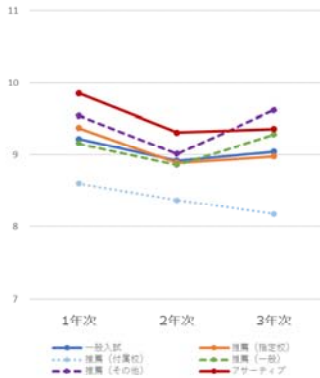
* 1年次と2年次は「基礎学力」(同じ趣旨の問題)、3年次は「批判的思考力」を測定したため、単純に推移は比較できない。

自分史上、
想像以上!

協調的問題解決力①

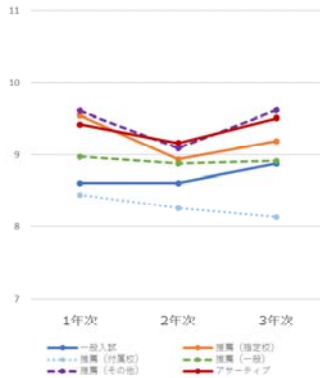
●挑戦する力

Q01_挑戦する力_進路など自分にとって大切なことは自分で決めてきた
Q19_挑戦する力_目標を持ったから実現のための計画を立てた
Q55_挑戦する力_難しいと思えることでも挑戦した



●続ける力

Q02_続ける力_目標ややるべきことは意識し続けた
Q29_続ける力_苦しい中でも続けられるように工夫した
Q74_続ける力_一度決めたことは最後までやり遂げた

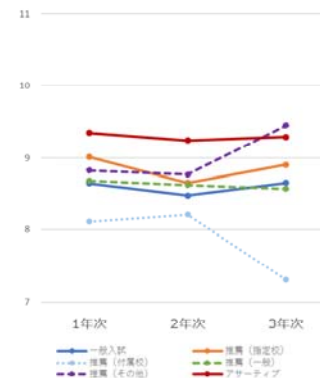


自分史上、
想像以上!

協調的問題解決力②

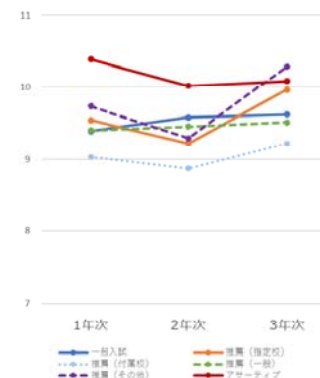
●ストレスに対処する力

Q21_ストレスに対処する力_嫌なことや苦手なことでも、その経験はためになると思って取り組んだ
Q57_ストレスに対処する力_勉強がうまくいかなかったとき、先生や友達にアドバイスをもらって乗り越えた
Q66_ストレスに対処する力_ストレスを感じたとき、その問題と向き合い克服した



●多様性を受容する力

Q22_多様性を受容する力_相手との考え方が違った場合、なぜ違うのかを考えた
Q31_多様性を受容する力_自分とは違う考え方をする人から自分にないものを学んだ
Q76_多様性を受容する力_幅広い年代の社会人と話し、生き方を学んだ

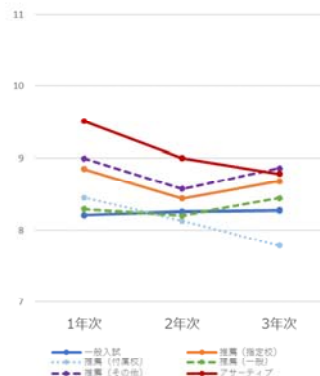


自分史上、
想像以上!

協調的問題解決力③

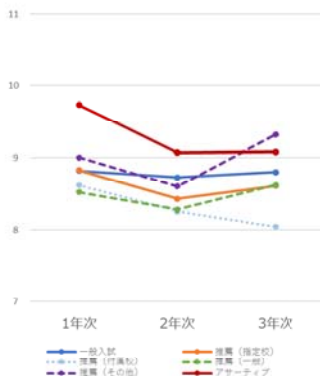
●関係性を築く力

Q14_関係性を築く力_初対面の人でも積極的に声をかけた
Q68_関係性を築く力_チームの中で自分が何をすべきかを考え実行した
Q86_関係性を築く力_チーム内でトラブルが起こったとき、自ら働きかけて問題を解決した



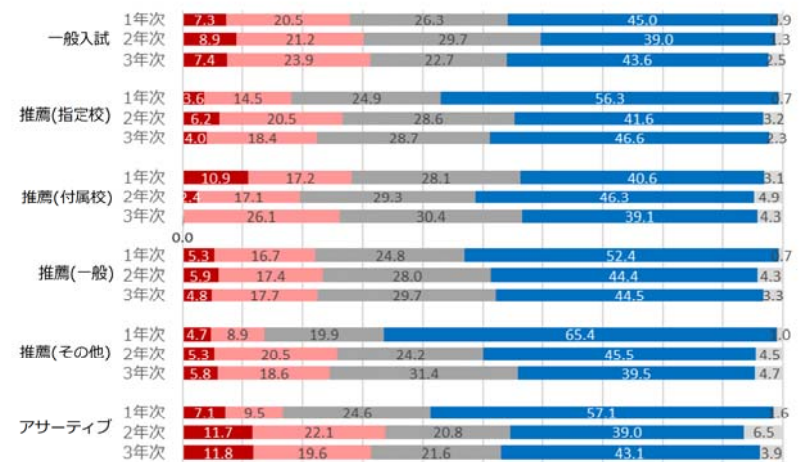
●議論する力

Q06_議論する力_チーム活動では自分の考えや意見を積極的に主張した
Q42_議論する力_相手の発言の矛盾や不筋点は質問した
Q60_議論する力_議論(話し合い)の場では最終的な合意の形を意識しながら発言した



自分史上、
想像以上!

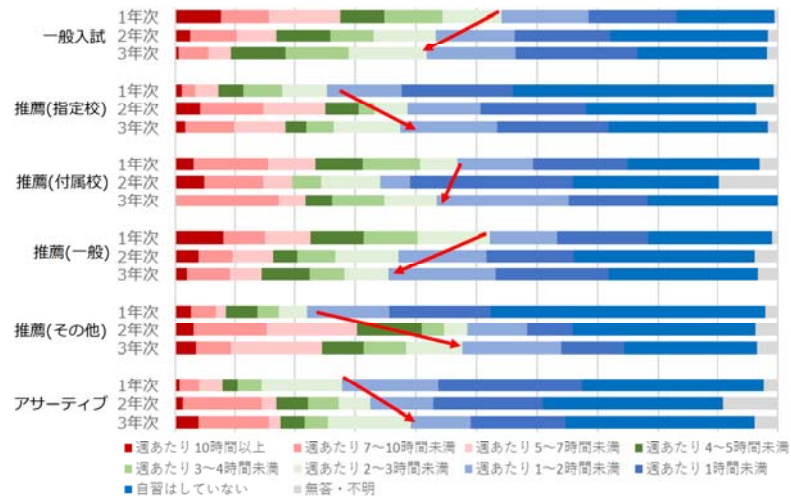
読書量/月



■月に4冊以上 ■月に2〜3冊くらい ■月に1冊くらい ■ほとんど読まない ■無答・不明

自分史上、
想像以上!

自習時間/週



自分史上、
想像以上!

教育改革の取組

教育改革本部からの改革提案

- ・カリキュラムマップの策定とナンバリングによる、教育の構造化の推進(2019)。
⇒DP、CPの再設定。
- ・各学部で検定テストの試行的実施(2018)
⇒学びの質保証
- ・オйнаビ(教職員側からはカルテ、学生側からはポートフォリオ)のシステム構築(2018～2019)
⇒学修成果の可視化と成長の可視化

30

高大接続改革の取組

- ・併設校でのアサーティブプログラムの実施
- ・滋賀県立高校(5校)とのアサーティブプログラムを基盤とした粘り強い多様な高大接続の取組
- ・沖縄県の高校でのアサーティブ講演の実施(約10校)
- ・岡山県の県立高校でのMANABOSSの活用
- ・大阪府内のみならず地方の高校でのアサーティブ講演の実施

自分史上、
想像以上!

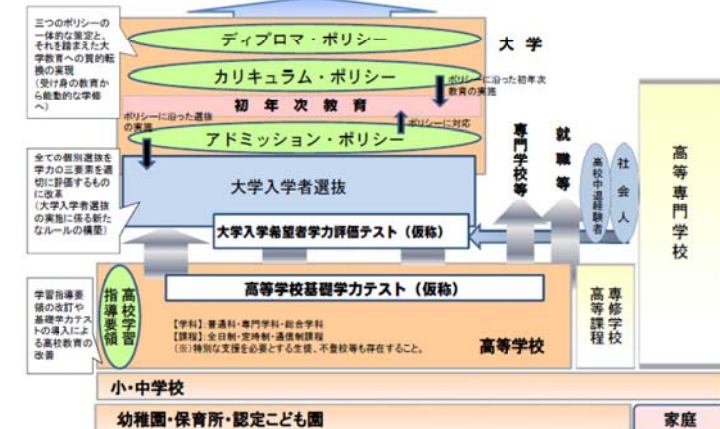
31

6. 高大接続改革

文部科学省高大接続システム改革会議
2016.3.11 資料より

初等中等教育から大学教育までの一貫した接続イメージ(高大接続改革の全体像)

社会への送り出し (学校教育の入り口から出口まで一貫して社会との関係を重視)



11

未来に生きる子どもたちのための教育

- 世界では、経済のみならず、社会・政治・安全保障等への観点が20世紀とはまったく異なる時代がひらけていく。
- 国内では、若年人口の急減(1993年～)、労働生産性の低下(2004年～ G7最下位)が起こっている。
- 今の子どもたち・学生たち、これから生まれる子どもたちが生きていく「未来社会の構図」を描かなければならない。
- 「情報」の概念を社会の基盤とする時代がひらけている。「情報」の概念の基礎には「インタラクション」、「主体性」、「学び」がある。
- 「未来に生きる子どもたちのための教育」はその時代の根幹に位置する「子どもたちへの贈りもの」である。
- 高大接続改革は「未来に生きる子どもたちのための教育」を実現するための大きな歩みである。

- 2018～2022 第3期教育振興基本計画
- 2016～2020 第5期科学技術基本計画

©Yuichiro Anzai

33

教育の転換と社会改革

- 十分な**知識・技能**を持ち(Performance)
 - それを活用できる**思考力・判断力・表現力**を臨機応変に発揮でき(competency)
 - 主体性**をもって多様な人々と協力して学び、**働く力**(attitude)
- が身につく教育の機会をすべての子どもたちが持てるようにするにはどうすればよいのか？

→ 2019年度から高大接続改革を開始

©Yuichiro Anzai

34

「大学入学共通テスト」の概要

導入年度		2021年度入試(2020年度実施)
実施日程		1月中旬の2日間
出題教科・科目		現行の大学入試センター試験と同じ
英語4技能評価	評価方法	大学入試センターが認定した民間の資格・検定試験を活用(認定試験)
	受検期間・回数	高校3年生の4月～12月の2回まで
	成績結果の表示	試験結果及びCEFR(外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠)の段階別評価
	共通テストとの併用	2024年度入試までは共通テストの英語試験と併用(認定試験の実施・活用状況等を検証)
記述式問題の導入	出題科目	「国語」、「数学Ⅰ」、「数学Ⅱ・数学A」
	実施方法	当該科目の試験時間内で実施(国語は100分程度、数学は70分程度試験時間を変更)
	出題形態	国語はマークと記述式で大問を分けて、文字数80～120字程度の問題を含め3問程度出題 数学は大問中に混在する形で3問程度出題
	採点方法	大学入試センターで採点するが、民間事業者への委託も活用
	成績結果の表示	段階別表示(3～5段階程度)
大学への成績提供		共通テストの成績とともに認定試験の成績を大学入試センターから大学に提供 提供時期は現行よりも1週間程度遅らせることも検討 「国語」は分野ごとに分けず、一括して提供することも検討

Between2017.7-8月号が文部科学省「大学入学共通テスト実施方針(案)」(2017年7月10日)より作成

「大学入学者選抜実施要綱の見直し(2021年度入試)」のポイント

アドミッションポリシーに基づき
「学力の3要素」を多面的・総合的に評価する選抜に改善

入試区分	一般入試⇒一般選抜(仮称)	AO入試⇒総合型選抜(仮称)	推薦入試⇒学校推薦型選抜(仮称)
特徴	共通テストや各大学が実施する教科・科目に係るテストに重点	入学希望者が自ら表現する能力・適性、学習意欲、目的意識等の評価に重点	高等学校が在学中の学習成果を評価したうえで、大学に対して行う推薦に重点
内容面の改善点	「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の評価が不十分 ↓ 調査書や志願者本人の記載する資料等を積極的に活用 活用方法は募集要項等に明記	「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」の評価が不十分 ↓ 各大学が実施する評価方法(小論文等やプレゼンテーション、口頭試問、実技、教科・科目に係るテスト、資格・検定試験等の成績など) また、共通テストのうち、少なくともいずれか1つの活用を必須化	
	出題科目の見直し・充実 記述式問題の導入・充実 英語4技能評価の導入	志願者本人の記載する資料等を積極的に活用	推薦書の中で学力の3要素の評価を必須化
実施面の改善点	試験期日:2月1日～3月25日まで 合格発表時期:3月31日まで ※共通テストの追・再試験の翌日以降とする条件有	出願時期:9月以降 合格発表時期:11月以降	出願時期:11月以降 合格発表時期:12月以降
入学前教育の充実	——	特に12月以前に入学手続きをとった者には入学前教育を積極的に講ずる	高大連携(高校から取組状況を大学に報告する等)して取り組むことが望ましい

Between2017.7-8月号が文部科学省「平成28年度における大学入学者選抜改革の主な取組み等について」(2017年5月16日)より作成

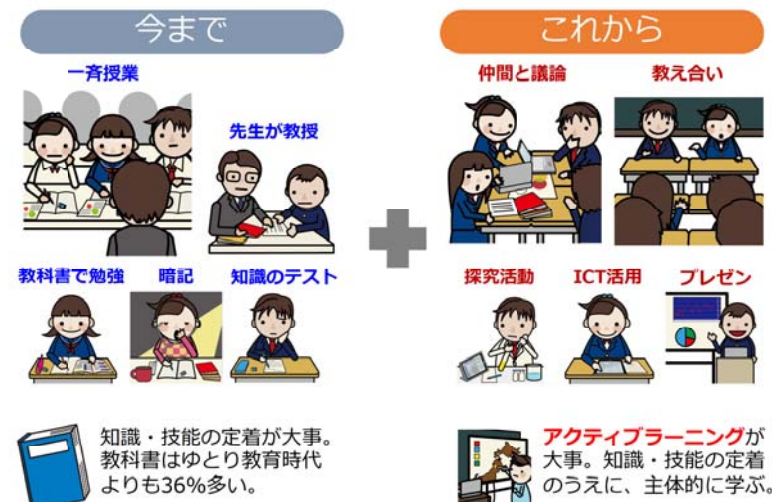
7. マーチン・トロウによる高等教育システムの段階的移行に伴う変化の図式

(M. トロウ、喜多村和之編訳『高度情報社会の大学』玉川大学出版部、2000から)

高等教育システムの段階	エリート型	マス型	ユニバーサルアクセス型
全体規模(該当年齢人口に占める大学在籍率)	15%まで	15～50%まで	50%以上
高等教育の機会	少数者の特権	相対的多数者の権利	万人の義務
大学進学要件	制約的(家柄や才能)	準制約的(一定の制度化された資格)	開放的(個人の選択意思)
高等教育の目的観	人間形成・社会化	知識・技能	新しい広い経験の提供
高等教育の主要機能	エリート・支配階級の精神や性格の形成	専門分化したエリート養成＋社会の指導者層の育成	産業社会に適応しうる国民の義務
高等教育機関の特色	同質性	多様化	極度の多様化
学生の選抜原理	中等教育での成績または試験による選抜(能力主義)	能力主義＋個人の教育機会均等化原理	万人のための教育保証＋集団としての達成水準の均等化
大学の管理者	アマチュア大学人の兼任	専任化した大学人＋巨大な官僚スタッフ	管理専門職
大学の内部運営形態	長老教授による寡頭支配	長老教授＋若手教員や学生参加による”民主的”支配	学内コンセンサスの崩壊？ 学外者による支配？

37

8. 教育が変わる



38

9. 高校進路指導と大学入試の実態

・高校の進路指導

- ⇒ 偏差値による進学先選択が中心
- ⇒ 自己肯定感を育てることが不十分で大学選びの方法を教えることも十分にできない(その時間がない?)

・自己卑下感情の蔓延(日米中韓の高校生比較で日本が最高)

- ⇒ 自己肯定感の欠如

↓

大学の入試を変えなければ高校の進路指導は変わらない

39

大学入試の実態

- ・ 学力入試で入学する学生は約半数
- ・ 多様な入試⇒ 一般、センター試験、公募推薦、指定校推薦、AO、スポーツ推薦、小論文、自己推薦、併設校推薦・・・
- ・ その結果、多くの大学で基礎学力不足・進学目的不明確・学習意欲不足・ミスマッチ等の問題が課題となる

⇒ アドミッションポリシーはほとんど形式的?

40

10. 「選抜型」から「育成型」の入試へ

・これまでは

受験生を多く獲得して、その中から「選抜」していた。

・これからは

入試の前から、大学進学のための目的、進学先大学の選択理由を受験生本人に深く考えさせ、学ぶ意欲を高めるようにする、すなわち、入試に耐えられるよう育成する。

41

11. 高大接続の新たな展開

・これまでは

エリート型……従来の学力での入試のみ。高大接続についての取組は一切無し。

マス型……知識偏重とワンチャンス限りの入試への反省から、推薦やAO入試の導入。
直接的な高大接続の取組はほとんど無し。

ユニバーサル型……入試の多様化。推薦入試は、早期に合格が決まる入試へと転化。指定校制度などは、大学側からは学生確保の手段、高校側からは進学実績確保の手段に転化。AO入試も同様。学力不問の入試制度も。大学から高校への出前授業なども活発に行われるが、大学側は志願者確保の思惑、高校側は業者に丸投げの手抜きとなり、大学と高校が生徒の進路を考えさせる取組としては極めて不十分。

42

・これからは

個々の大学と高校とが協働して、生徒の将来の生き方について、自ら考えることのできる手法を開発し、**生徒の自己肯定感を育てる**。すなわち、人間の成長における**青年期のアイデンティティ形成と学びのモチベーション形成**について、**高校生の実態に合わせた高・大の協働**が必要。

その中でも、学力の三要素を身につけさせることのできる手法の開発・実践・検証は、大学と高校の協働無くしては不可能。

これらのことに取組ながら、アサーティブなど新しい入試制度の開発が必要。

43

12. 職員が大学教育にも責任を持つ

・学生との対話

・学力の三要素（知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性）

・学びへの動機づけ

・学生一人ひとりに対する発達支援の具体的な方法の提示と実践

・知識だけでない評価方法の具体的な提示と実践

・学生同士の学びあい・教えあいの場の設定

・学生の主体性を育むことができるコミュニケーション力の養成

・学生が、社会人としての知識や態度を身に付けることができるよう仕向ける

44